

高齢者における説明文記憶の方略変更を支援する標識の明示性

○山本 博樹 (大阪学院大学) 島田 英昭 (日本学術振興会/産業技術総合研究所)

目的

老年期まで続く生涯学習では教材(例えば説明書)の主体的な学習が入口になるため、それを通じて学習に出会わせる支援のあり方を考えることは支援ニーズに叶う。山本・島田(2006)は、表現技法である標識化が体制化方略の変更を介して記憶を向上させる効果過程を示したが、加齢に伴い低下する方略変更を支援するためには、環境的支援仮説(Craik et al, 1992)に基づき、標識の明示性による支援が有効と考えた。そこで、本研究では、標識の明示性が高齢者において、1)方略変更を支援するか、2)方略変更を介した効果の波及が認められるか、3)効果過程の所産(体制化・再構成のレベル)を支援するか、について、山本(2006)による(1)の検討を踏まえて、2)と3)を検証した。

方法

実験計画: 標識の明示性のレベル(無条件/低条件/高条件)について高齢者と若齢者を比較した。

実験参加者: 前期高齢者 90 人。比較対象として若齢者(大学生) 90 人。それぞれを 3 群に分けた(明示性無条件, 明示性低条件, 明示性高条件。以下, 無, 低, 高と略)。

材料: 10 文の手順説明文。無条件では最上位手順は明示されない。低条件では見出しを標識として挿入。高条件では、見出しに文字飾りを施した。

手続き: 文配列課題の後、手順文を正しい順序で提示し、読んで記憶するように求めた後、再生課題と再構成課題を実施した。

結果と考察

1) 方略変更を介した効果の波及過程

標識の明示性による方略変更が体制化と再構成(記憶)のレベルにまで及ぼす効果を共分散構造分析によりモデル化した。多母集団同時分析を行い Figure 1 を得た(各指標の得点法は後述)。適合度指標より、モデルは適合していると判断した。

高齢者と若齢者には 2 点の違いが見られた。第 1 に、高齢者は若齢者に比べて明示性から修正数へのパス係数が大きく、その差は明示性高からでは有意($p < .05$, 片側)、明示性低からでは有意傾向($p < .10$)。これは前回発表の分散分析の結果と一致する。第 2 に、高齢者における修正数へのパス係数は、明示性高からの方が明示性低からよりも大きく、その差に有意傾向が見られた($p < .10$)が、若齢者では有意ではなかった。その一方で、修正数から体制化レベルを介して再構成レベルに至る効果過程は、高齢者と若齢者ともに確認できた。

以上から、高齢者は若齢者に比べて方略変更に対する標識の明示性の効果が大きく、その違いが体

制化と再構成のレベルにまで影響を及ぼすことが明らかになった。

2) 効果過程の所産(体制化と記憶)の支援

まず、体制化レベルについて隣り合って配列された文の関係が正しい時に 1 点を与える連得点を求めた(9 点満点)。高齢者に 1 要因の分散分析を実施した結果、明示性の主効果が有意で ($p < .01$)、多重比較の結果、無=小<大となった。同様に大学生では明示性の主効果が有意で ($p < .01$)、多重比較より無<小=大となった。

次に、再構成レベルの分析を二つ行った。一つは階層レベルについてであり、最上位手順の再生数について同様の分析から、明示性の主効果が高齢者・若齢者ともに有意で ($p < .01$)、多重比較の結果、ともに無<小=大となった。もう一つは系列レベルとして、再構成の連得点を算出し、高齢者について同様の分散分析を行った結果、明示性の主効果が有意で ($p < .01$)、多重比較より、無=小<大となった。若齢者についても同様の分析の結果、明示性の主効果が有意で ($p < .01$)、多重比較より、無<小=大となった。

以上より、標識の明示性を高めると、体制化レベルと再構成レベルを促す結果みられた。

3) 総括

分析から、標識の明示性が高いと、高齢者では、加齢に伴い低下する方略変更が支援され、その効果が波及し、体制化レベルや記憶レベルを支援することが示された。この一方で、標識の明示性が低いと、高齢者の方略変更が支援されても、後続の過程に必ずしもつながらないことが示され、明示性に応じて異なる効果過程をもたらした。

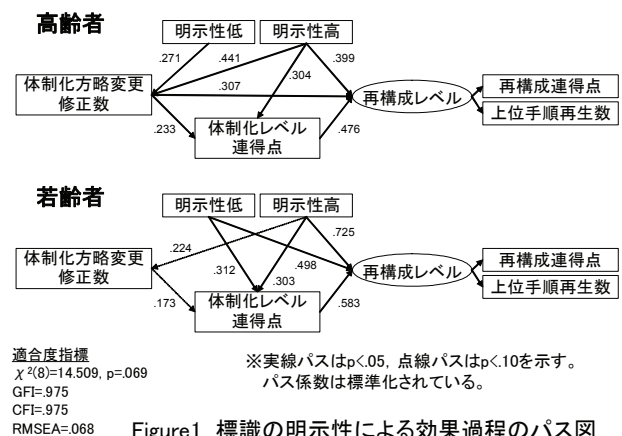


Figure 1 標識の明示性による効果過程のパス図

付記: 第 1 著者は、平成 15-17 年度科研費補助金(基盤研究 (C))(2):課題番 15530440)の助成を受けた。